【ひまわり平和研究室　平口哲夫の文献リスト　東北大学基督教青年会会報 36:10-17】
http://sophiruka.sakura.ne.jp/KHP/publication/thuymca-kaiho.htm

インターネットホームページ
【東北大学基督教青年会館と大島正隆】

平口哲夫

勤務先のホームページの下位に標記のようなサイトを設けておいたところ、寮生の古谷雄一郎君を介して渡部治雄先生のお目に触れることとなり、会報にも掲載してくれないかとの話になった。そこで、会報用に書き改めたのが本稿である。

一　パソコンとホームページ

私がパソコンを使うようになったのは、十三年前、四十二歳のときだった。遺跡から出土したイルカ骨の計測値を統計処理するために、物理学教室のパソコンを貸していただいておそるおそる始めたわけである。三年後の一九九〇年（平成二）、科研費でパソコン（NEC-PC9801RX）を購入してから本腰で取り組むようになり、一九九五年（平成七）にはニフティのビジネスアカウント会員に登録して電話回線でＥメールを使いだした。翌年、勤務先において全学的にＬＡＮの敷設が実施されることになり、必要な端末機さえ備えれば手軽にインターネットを利用できるようになった。しかし、私のパソコンでは対応することができず、買い替えの予算もないため、ネットワークの恩恵にあずかることができない状況が続いた。一九九七年（平成九）、一般教育関係に何台か新品のパソコンが配布されることになり、そのおかげで生物学教室のお古のパソコン、といっても購入してから一年しかたっていないものだったが、富士通のFMV-5150DPSが押し出されるように私の手元に回ってきた。そこでまず、学内向けのイントラネットホームページを作成することにした。雑誌エーアイムック一五六の特別付録を利用して作成した試作品をその年の八月にオープン、ほどなくＩＢＭのホームページ・ビルダーを利用して学外向けのインターネットホームページも作成した。

【ＫＭＵ人文科学】の下位に設定した【ＫＭＵ歴史・人類学】のホームページにはいろいろなサイトが連なっているが、いずれも、教育・研究という学術的な目的に反しないように、また歴史・人類学に関連した内容となるように心がけている。たとえば、自己紹介のサイトでは、略歴からなんらかの意味で戦争と平和に関連したエピソードに入っていくことができるような構成をとっている。【十一屋小学校】では日の丸、【野田中】では旧兵舎、【泉丘高校】ではジョン・Ｆ・ケネディが登場する。そして、【東北大学】をクリックすると【東北大学基督教青年会館と大島正隆】のサイトが開かれるという仕組みになっている。

二　寮生活

一九六五年（昭和四十）に東北大学文学部に入学した私は、自炊生活を一カ月、下宿生活を二カ月ばかり送ってから東北大学基督教青年会館（渓水寮）の寮生となった。この寮は、一九三六年（昭和十一）に当時東北帝国大学法文学部長であった石原謙先生（一八八二～一九七六）が仙台市北三番丁上杉の一角に私財を投じて建てられた。しかし、終戦直後に米軍の将校宿舎として接収され、一九五二年（昭和二七）に学生寮として再出発したということであるから、寮の建物自体が戦争体験をしているといえよう。教養部のあった川内の校舎も旧兵舎を転用したものであり、進駐軍に接収された時期の面影を残していた。

入寮したきっかけは、下宿先があまりいい環境ではなかったので、良い下宿がないかと探しているとき、入学以来通っていた仙台広瀬河畔教会で櫻井牧師の娘さんから寮生募集の情報を知らされたことだった。さっそく電話で寮に問い合わせ、六月のとある日曜日の午後、面接を受けることなったのである。そのときいっしょに面接を受けたのは、野口君とその友人、それに私の三人であった。会館というイメージとはだいぶ見かけの違う建物の玄関先に現れたのが野村さんだった。面接担当者は野村さん一人であり、三人そろって二階の部屋に招かれて話を交わした。これまでどんな小説を読んだことがあるかという質問があり、思いつくままに何冊かあげたところ、ドストエフスキーは読んだことがないかというので、『戦争と平和』をあげたところ、なんだそれだけかというような顔をされたことを覚えている。それはともかく、入寮を許可されたのは野口君と私、それに別の日に面接をうけた成瀬君と正印さんの四人であった。同期であるにもかかわらず、正印さんと呼ぶのは、長い闘病生活のあとに入学され、だいぶ私よりも年上の存在だったからである。会報第十一号の青年会館日誌には六月に入寮したことになっているが、実際は夏休み中に引っ越しをしたので、寮生活の開始は実質的には七月以降のことであった。入寮まもなく、寮から近い教会のほうが行きやすいという理由で、東六番丁教会（宍戸達牧師）に通うことになった。その旨を櫻井牧師に伝えてご了解を得たが、いささか恩知らずなようで申しわけない思いがした。

三　大島正隆氏と伊東信雄先生

寮のホールには石原先生のお写真と大島正隆氏の遺影がいつも掲げられていた。石原先生のお写真は正面暖炉の上に、また、大島氏の遺影は台所に通じるドアの上に飾ってあった。その下で寮生は朝拝をし、食事をし、諸集会をもったのである。しかし、大島氏については、国史学科出身で将来を嘱望された秀才であったが、惜しくも早世されたということ、また、二高時代に治安維持法にひっかかって検挙されたことがあるということなどを、寮関係者から少しばかり伺ったことがある程度で、詳しいことを知らないまま学生・院生時代を過ごしてしまった。いま思うと、国史・考古学に身をおいていただけにまことに迂闊であった。

一九七四年（昭和四九）三月、すでに東北大学を定年退職されていた恩師の伊東信雄先生（考古学）に離仙の挨拶をしようとご自宅を訪ねた。そのとき、私が基督教青年会館に六年間いたという話を聞いて先生と奥様（きく夫人）は意外に思われたご様子だった。大島氏のことをよくご存知だったからである。「彼は優秀だったね―。惜しい男を亡くしたよ」と先生がおっしゃれば、奥様も「ほんとうにあの方はすばらしい人でしたね」と相づちを打たれ、感慨深げであった。

一九八六年（昭和六一）八月二十三日、東北大学教養部におられた渡部先生を訪ねたとき、国史の先輩入間田さん（現東北大学東北アジア研究センター教授）にばったり出会った。「大島正隆の遺稿集を伊東先生といっしょにまとめている最中です。寮に飾ってある写真をいずれ借りにいきますのでよろしく。大島はすごい人ですよ。短期間であれだけの功績を残したわけですから。舌を巻きますね」と入間田さんはさかんに感心していた。渡部先生が、会報三十三号「理事回顧三十年（その二）」（『渓水　こころの交流史』南窓社、一九九八、所収）で、「学会で来仙し寮に投宿中の平口哲夫元主事から「三十分だけ時間を下さい」と電話があり、私の研究室に見えたのはいつだったろうか」と書いておられるのは、このときのことである。筑波学園都市で開催された日本第四紀学会に出席後、鳴瀬町里浜貝塚の調査に参加するために仙台に立ち寄った際、一泊した寮の状況をみて一言申し上げることにしたわけである。「寮生の心もすさんできます」と発言したかどうかは記憶に定かでないが、夏期休暇中ということも影響してか、乱雑そのもの、まるでスラムのような状況になっているのを見かねてのことであった。一九九〇年（平成二）、東北大学基督教青年会館は仙台市大塩（おおとや）町に新築移転を完了したが、その後の状況を伺うと、建物が新築されれば整理整頓が行き届くということでもないようだ。

一九八七年（昭和六二）四月、伊東先生は不帰の人となられた。私は奥様宛てに伊東先生についての思い出を綴った弔電を送った。七年後の一九九四年（平成六）、奥様から思いがけず手紙と大島正隆著『東北中世史の旅立ち』（そしえて，一九八七）が送られてきた。七回忌に際して私の話を思い出し、この本を送ってくださったのかと思ったが、お手紙によるとそうではなく、東北大学文学部同窓会名簿に東北大学基督教青年会と記されているのを見てのことだという。以下、大島氏について書かれたお手紙の一部を抜粋紹介する（句読点は私が付加した）。

「戦前左翼の運動をなさっていて、旧制二高を退学なさったのですが、其後主人の進めで検定をうけられて文学部に入られ、国史を専攻された方です。熱心なクリスチャンの御家庭の御長男の方で実に御立派な方でした。主人がなくなった時も私が「大島さんが生きていて下さったらよかった」と一人で申して居りました。この本は主人が大島さんを世に紹介する為の本ですが、最後の校正も見ずに亡くなったのです。自分が戦後考古学ブーム

で忙しくて大島さんの紹介をする暇がなかった事を申訳なく思っていて、大島さん亡くなられて四十年の記念会のあとで自分も学院を退職後、国史のお弟子様方の御手伝をうけて出版する事にしたのですが、出版を見ず終わったものです。〕

なお、お手紙には以下のコピーが添えられていた。〔　〕内は、奥様による解説である。

① 野口明「エマーソンの報償論」：〔旧制二高の最後の校長先生が主人の東北大停年の時に送って下さったものを整理中に見つけ、皆様（二高の卒業生）に送りつづけたものです。〕

② Take time：〔私の学生時代の恩師（英語）より教へられたアメリカの教育で、人生の節目を教えています。皆様に御紹介して来たものです。〕

③ 最上のわざ（「人生の秋に」ヘルマン・ホイヴェルス随想集より）：〔人生の終りに近い者への教へで、先年京都で長岡輝子さんが朗読会で最後に朗読して大変会衆の拍手を受けた由でした。〕

④ 大島正隆著『東北中世史の旅立ち』の書評（一九八七年河北新報六月二十二日、社会新報七月三十一日）

いただいた本の頁をめくるにつれ、なるほど入間田さんが感嘆するのも、また、遺影が寮のホールに掲げられているのも尤もだと思った。この本には、大島正隆氏の実弟、大島智夫氏（横浜市立大学医学部教授）が書かれた「茨の冠―大島正隆の生涯―」が再録されている。これによると、一九〇九年（明治四二）三月五日に台北で生まれた正隆氏は、一九二八年（昭和三）第二高等学校に入学、山岳部で活躍しただけでなく、社会主義運動にも情熱を燃やした。一九三二年（昭和七）校友会理事選挙に学校側が干渉、これを弾劾する学生たちがストライキに入った。ストライキそのものはその年の内に解除されたが、翌年一月、特高警察はストライキ責任者・扇動者として学生十二人を治安維持法違反の疑いで検挙、正隆はその槍玉にあげられたのである。学校側は十二名を即刻退学処分、そのうち十名はやがて保釈となったが、正隆ほか一名は未決拘留された。留置場では言語に絶する拷問が加えられたにもかかわらず、正隆は仲間の不利になることは一切自白しなかった。母親が獄舎に新約聖書を差し入れた日こそ、新たに生まれ変わる記念すべき日となったと、後年、母親宛の葉書で正隆氏は回顧しておられる。同年中に公判開始、執行猶予となり釈放されたとはいえ、山岳部で鍛えた身体は見る影もなくやせ衰えていたという。

一九三五年（昭和十）、塚本虎二の聖書講義集会、ギリシャ語研究会に参加。また、柳田国男に師事し民俗学を学んだということに注目したい。翌年、文検合格、四月東北帝国大学法文学部国史学科に入学。古田良一教授、喜田貞吉講師に師事。また、同大学基督教青年会で石原謙教授の薫陶を受ける。一九三九年（昭和十四）三月東北帝国大学卒業、四月同大学国史研究室副手となる。この間に東北地方の山海の民俗に関する文章を書いている。いまエスノ・アーケオロジーの分野で注目されているマ

タギについても詳述。一九四一年（昭和十六）四月から基督教青年会寄宿舎（現渓水寮）に入り、後輩の指導にあたる。一九四一年から一九四三年までのわずか三年間に、東北地方の中世史に関する珠玉の論文六編を発表、未発表原稿一編をのこした。一九四四年（昭和十九）一月二十二日、療養先の千葉県勝浦において逝去、享年三十四歳。

大島氏の勝浦療養については、中川秀恭先生が岩波図書一九七八年十一月号に寄せられた「石原謙先生の追憶」のなかに次のように述べられている（渡部先生から送っていただいたコピーによる）。「彼は大学卒業後研究室に残り、前途を嘱望されていたが、間もなく肺をわずらい、千葉県勝浦に転地、療養することになった。昭和十八年秋、仙台からわれわれ数名の者が勝浦へ出かけ、東京からきた先生と落ち合い、大島君を療養先に見舞った。同君を中心に集会をし、しばらく歓談の後、近くの旅館に泊まり、翌日再会を約して別れたが、翌年一月多くの人々の期待にそむいて急逝した。彼は和歌をよくした」と。大島智夫氏も『茨の冠―大島正隆の生涯―』において、兄に当る正隆氏の枕辺に残された遺詠のうちの一つを紹介している。

たまゆらのいのちのきはみおほみてに
負はれまつらむかしこかれども
癒えざるか癒ゆるかしらにみさだめの
ままにぞ歩むいやひたすらに

勝浦は、衆議院議員となった森英介君の選挙区（千葉三区）内にある。森君は、私が米ケ袋に間借り生活をし始めた修士課程一年のときに入寮し、博士課程二年間の主事時代に寮生活を共にしただけでなく、課程最後の年に同じ間借りの屋根の下で暮らしたという仲だけに、実に愉快な付き合いをさせてもらった。森君の御尊父も衆議院議員であり、環境庁長官も経験された方だが、その出身地で大島氏が逝去したという事実に「因縁」を感じたという話を森君自身の口から聞いたことがある。私は、一九九〇年から一九九八年にかけて、その勝浦に近い鴨川市で開催された国際シンポジウムにおいて、通算七回研究発表をする機会があり、そのたびに大島氏と森君のことを思い出したものである。

四　Eメールによる交流

さて、寮関係のことをホームページに書いているうちに、寮にパソコンがあって、寮独自のホームページを開設したり、インターネットでメールのやりとりができると、寮生とOBとの交流が日常的にできてよいのではないか、しかし、すぐには実現できないかもしれないので、まずはOB間でEメールのネットワークを作ればよいのではないか、と思うようになった。そこで、その旨を記した手紙（一九九八年十月十三日付け）を寮生宛に出したところ、当時寮生であった高徳君からEメールで以下のような返事がきた。「実は、半年ほど前にも高津兄より提案があったのですが、そのときは寮生の反応があまりはっきりしなくて、おながれになっています。しかし

寮にパソコンが入ればその効果は非常に大きいものになると思います。次回の寮生総会に早速かけて、理事会の方に寮生の方からもかけてみようと思います」と。

一九九九年十一月十三日、東京の学士会館で開催されたＯＢ会に初めて出席した。長野出張のついでのことであり、その日のうちに帰らなければいけなかったので、途中参加、途中退席という失礼をしてしまったのは申しわけなかったが、交流の在り方を私なりに考える機会になった。会場で拝見した返信ハガキにＥメールアドレスを記したものが四通あり、また、懇親会の席で、石館兄から「寮にファックスぐらい置けないのか」という意見があったので、Ｅメールによる方法も検討されたらどうかと提案した。渡部先生は、それはいいにしても電話をもう一台設置する必要があるという点が問題だと答えられた。ＩＳＤＮ回線を引けば電話中でもＥメールを利用できるはずだと私は申し上げたが、寮の電話が公衆電話であることを忘れての発言だったことをお詫びする。

後日、返信ハガキにＥメールアドレスが書いてあった方を含めて六名のＯＢにメールを送ったところ、今井兄から「今後、名簿にもご本人の了解が得られた方については、自宅、勤務先の区別をして、Ｅメールアドレスを記載してはどうでしょう」という返信がさっそくあった。そこで、ＯＢ会の世話をしてくださっている東矢君に手紙を出し、ＯＢ会案内の返信ハガキにＥメールアドレスの欄を設けていただけないか、また、Ｅメールを利用している会員はアドレスを知らせてくださるように会報などに案内を掲載するとよいのではないか、というお願いや提案をしておいた。同月二十九日、ＯＢ会で顔を合わせた寮生の古谷君からＥメールが届いた。それによると、学Ｙ関係の連絡を担当している者にとってパソコン導入の必要性は高いが、導入するにはいろいろ解決しなければいけない問題があって、すぐには結論が出ないという。それに対する私の感想は、この問題はべつに急いで解決する必要はなく、寮生の主体性にまかせればいいことであるから、当面、寮生の有志と個人的にＥメールで交流するだけでもよい、というものであった。

会報第三十五号（一九九九年十二月発行）にＥメールネットワークの構築を呼びかけたチラシを挿んでいただいたことから、呼びかけに応ずるＥメールが旧寮生から届くようになった。現在、メールリストに掲載されたメンバーは二十五名を数える。三月十三日に、古谷君から教えてもらった高津君のアドレスにＥメールを送ったところ、すぐネパールから返事が来たのには驚いた。再びネパールに行って活動していることを私は知らなかったからである。これがきっかけで、ネパール体験を綴ったホームページ【ビンティ】や、奥さんとの共著『ビンティ―高津クン、ネパールにハマる―』を読ませていただいた。そのほか、寮生・旧寮生のホームページとして【ゆう君のページ】、【伝道師の館】、【富良野教会田村伝道師のページ】、【ドクター・ノグチのホームページ】、【若草教会】、【心療内科医の喫茶店】があり、当方のホームページにリンクを設定してあるので、ぜひご覧に

なっていただきたい。四月十九日に古谷君からきたメールによると、神正人兄からパソコンの寄贈があり、会報作成や名簿管理に使わせていただくとのことであった。現在、寮の近況は古谷君の個人的サイト（http://ha8.seikyou.ne.jp/home/Yuichiro.Furuya/index.htm）によって知ることができる。

なお、五月二十五日、大島正隆氏の妹の息子さん、つまり正隆氏の甥に当る小泉佑（たすく）氏からEメールが届いたことを紹介しておきたい。小泉氏は、当方のホームページを見て、問合わせのメールをくださった。メールによると、小泉氏の御尊母は、戦時中の苦しい時代、療養生活中に千葉県勝浦で亡くなった正隆兄の最後に誰も立ち会えなかったことを残念がっておられたという。御尊母の末弟にあたる大島智夫氏が医師の道を選ぶ大きな契機になったようで、また、御尊父にあたる小泉磐夫氏は、塚本寅二先生の聖書集会のメンバーであり、正隆氏と共に聖書を学んだ間柄であった。当方のページにより、『東北中世史の旅立ち』が研究上、「素晴らしいものと分かり、大変嬉しく感謝します。伯父の祖父大島正健の資質を受け継いだものと思います」と感想を述べられ、正隆氏の渓水寮での活動、写真が寮のホールに掲載されるに至った経緯、および寮に何か関係資料があるかどうかを知りたいと結んであった。

私の父は一九一〇年（明治四三）生まれであるから、大島正隆氏はまさに父親の世代に属する。父は、太平洋戦争が始まる前の年、すなわち一九四〇年（昭和一五）十一月から一九四五年（昭和二十）四月まで山梨高等工業学校で数学の教授をしていた。戦争末期には、このような理数系の教員にも赤紙（召集令状）が来るようになり、一九四四年（昭和一九）秋、父にもついにそのときがきた。父は敦賀にある母方の分家に婿入りしたことになっていたので、敦賀のほうでも水盃を交わし、近所の人に見送られて「出征」した。しかし、ひどい痔疾を患っていたので、身体検査に引っ掛かり、「養生したまえ」と軍医にぽんと尻を叩かれただけで帰ってきた。「出征」の際に工業学校の同僚たちが寄せ書きをしてくれた日の丸の旗が、戦後も自宅の箪笥の引き出しの中に大切にしまわれていた。その寄せ書きをしてくれた人たちの中には、ほんとうに出征して帰らぬ人となった方もいる。工業学校の生徒たちと撮った卒業写真も残されているが、その生徒たちからも戦死者が出た。父はめったに昔話をしない人で、「出征」の話は母から何度も聞いたが、工業学校の日の丸と卒業写真にまつわる話は生前、父からただ一度聞いただけである。ごく最近、石川護国神社境内に高さ約十二メートルの「大東亜聖戦大碑」が完成した。金沢市内の元兵士らが「正しい歴史」を後世へ伝えるために、全国の戦友会などに募金を呼びかけて建設したという。なんという時代錯誤であろうか。

（二〇〇〇年八月七日脱稿）